

平成21年度 【 学園研究費助成金< B > 】 研究成果報告書

学部名 教育学部

刀がナ オオモリ タカコ
氏名 大森 隆子

研究期間 平成21年度

研究課題名 折り紙の教育的価値の探求

研究組織

	氏名	学部	職位
研究代表者	大森 隆子	教育学部	教授
研究分担者			
研究分担者			

1. 本研究開始の背景や目的等 (200字~300字程度で記述)

現在、我が国の伝統文化と深い関係を持つ、日本の伝承遊びは継承が弱まりつつある。「あやとり」、「お手玉」などは一部で細々と伝えられ、また、「下駄隠し」、「缶けり」、「今年のぼたん」などの仲間遊びはこの20年から30年の間に消滅してしまった。本研究は、それらの中で、今日盛んに取り上げられている「折り紙」に焦点を当てて考察することを目的とする。なぜ、折り紙遊びは隆盛を誇っているのかを解くことで、伝承遊びの本質や時代と遊びの関係、また子どもの育ちへの日本の伝統文化の影響を解明できると考えるからである。

2. 研究方法等 (300字以内で記述)

幼稚園や保育所・小学校など幼児教育・初等教育の場に残された資料（文献、教科書など）、また、そうした場での実践経験や研究を蓄積された実践者・研究者の業績を収集し、主として文献面からの分析研究を行った。

資料の収集は、個人や企業等所蔵の博物館（唐沢博物館、印刷博物館、民芸館）、幼稚園の保存資料など実際に出向いて確認・検証したり、全国各地の図書館から書籍を取り寄せるという方法を用いた。

3. 研究成果の概要 (600字～800字程度で記述)

「折り紙」遊びは、江戸時代末に庶民の遊びとして確立し、寺子屋や幼稚園、小学校の教材としても活用された。これは、今回の資料収集を通して確認された点である。しかし歴史を跡付けてみると、2回ほど排斥されていることが分かる。1度目は大正自由教育の波を受けて、2度目は第二次世界大戦後の新教育の波を受けてのことである。いずれも、自由な活動を保障し、創造性を伸ばす教育を阻害するものとされたためである。ところが、昭和50年代頃から「折り紙」ブームが起き、現在に至っている。現代の教育・子どもの遊び環境と「折り紙」はどのような関係や位置づけを持っているのだろうか。今回は教育的な価値という側面からその核心に迫りたいと考えた。特に、子どもの自由性や創造性を伸ばすことと、「折り紙」活動の特徴に着目した。

「折り紙」ブームの思潮は大きく二つに分かれる。一つは教育関係者で、幼稚園や保育所など幼児教育の実践者を中心とするもの。二つは折り紙作家といわれる創作物・伝承物の作家やデザイナーたちである。それぞれ「折り紙」に求める価値は違いがあるが、まず、教育者・幼児教育の場での実践者に焦点を当てて考察を試みた。この分野での先行研究はほとんどないため、該当する者の選定から始め、年代別に4人を抽出し、文献資料をもとに考察を進めた。副島ハマ、待井和江、仲田安津子、川並知子である。いずれも資料が入手でき、比較検討する方式で明らかにした。その結果、教育的価値の面で共通性がみられ、とりわけ、自由性・創造性の点では、いずれも「折り紙」は備えていることを指摘していた。指導者がこの点を押さえていれば、「折り紙」の指導に際して有効に働くと強調しているのである。かつての排斥論を意識しての論である。

4. キーワード (本研究のキーワードを1以上8以内で記載)

①折り紙の実践者	②教育的価値	③創造性	④自由性
⑤折り紙ブーム	⑥折り紙の排斥	⑦	⑧

5. 研究成果及び今後の展望 (公開した研究成果、今後の研究成果公開予定・方法等について記載すること。既に公開したものについては次の通り記載すること。著書は、著者名、書名、頁数、発行年月日、出版社名を記載。論文は、著書名、題名、掲載誌名、発行年、巻・号・頁を記載。学会発表は発表者名、発表標題、学会名、発表年月日を記載。著者名、発表者名が多い場合には主な者を記載し、他〇名等で省略可。発表数が多い場合には代表的なもののみ数件を記載。)

研究成果の公開

「教育学部紀要 第3号」平成22年3月発刊予定

今後の展望

今回の研究のための資料収集過程で、新しい資料の発掘が切り開けた。それは、明治時代から現在に至る教科書資料である。小学校の図画工作、中学校・高等学校の家庭科に記載を一部発見した。この分野の整理は未踏であるため、今後はこの資料の整理を重点的に行いたい。なお、幼稚園の場合は教科書がないため指導案や実践報告の資料を探ることとしたい。そのベースに、幼稚園から小学校、中学校、高等学校へと繋ぐ、連続的な視野を持ってあたりたい。